
またいつか一緒に【第 1 6 話】

伝次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またいつか一緒に【第16話】

【Nコード】

N1985W

【作者名】

伝次郎

【あらすじ】

修学旅行の帰り、僕は事故に遭い不自由な身体になった。そんな僕を冷たくあしらった友達に、代行業者を使い復讐しようと思った。次々と起こる復讐劇。しかし次第に僕は不安になる。これは他にも犯人がいるのではないか、と思い始めたのだ。そしてまた、僕は誰かのせいだと思うが、階段から転落してしまったのだった。

（前書き）

リレー小説（第二弾）設定・注意事項

全40話

一話2000文字以上

登場人物数制限なし

ファンタジー要素無し

SF要素無し

地の文は主人公視点

重複執筆可

ジャンルはその他

執筆予約制廃止（予約を入れてくださる著者様を拒みはしません。執筆予約を入られた著者様に関しては、活動報告に掲示させていただきます）

執筆著者様は、執筆前にご連絡ください

執筆投稿後、必ず御一報ください

あらすじは、前話までの要約を明記

全ての物語を聖魔光闇さんと私がお気に入り登録します
後書きに執筆著者様募集広告を添付

1話：聖魔光闇先生 <http://ncode.syosetu.com/n1590t/>

2話：日下部良介先生 <http://ncode.syosetu.com/n2296t/>

3話：ふえにもーる先生 <http://ncode.syosetu.com/n3991t/>

4話：koyak先生 <http://ncode.syosetu.com/n3991t/>

tu.com/n4630t/
5話：創離先生 <http://ncode.syosetu.com/n8318t/>
6話：蟻塚つかちゃん先生 <http://ncode.syosetu.com/n9612t/>
7話：聖魔光闇先生 <http://ncode.syosetu.com/n1100u/>
8話：伝次郎 <http://ncode.syosetu.com/n2759u/>
9話：koyak先生 <http://ncode.syosetu.com/n4425u/>
10話：このはな さくら先生 <http://ncode.syosetu.com/n4766u/>
11話：鳩麦先生 <http://ncode.syosetu.com/n8057u/>
12話：ポテトバサ先生 <http://ncode.syosetu.com/n1332v/>
13話：聖魔光闇先生 <http://ncode.syosetu.com/n5466v/>
14話：真野 優先生 <http://ncode.syosetu.com/n8285v/>
15話：koyak先生 <http://ncode.syosetu.com/n9776v/>

よろしくお願いします。

停留所に止まったバス。

乗らなきゃ……。ステップに足をかけて、中に入ってしまったえば、黙っていても目的地に連れて行ってくれるはずだ。

分かっているのに、勝俊は足を踏み出すことができない。
バスのクラクションが鳴る。乗るのか乗らないのか、はつきりしろ、と言っているのだろう。

分かっている……分かっているよ。

運転手の目が、自分を睨んでいるのが感じられた。

背後から駆け寄ってくる足音が聞こえる。その足音は勝俊を通り越して、そのバスに慌てるように乗り込んだ。中年のおばさんだ。

「あー、間に合ってよかったわ」

その声が聞こえた途端、怒りを爆発させるかのように、勢いよくドアが閉められた。

そんなに急発進したら、あのおばさん、座る前に転んでるだろうな、と勝俊は余計な心配をしていたのだった。

——これで何本目になるだろう。

あの場所に行こうと思って、ここ数日悩んでいた。いや、悩む必要なんかないのだろうが、勝俊は心に引っかかるものがあつたのである。

小学校のときに行った修学旅行。伊勢、鳥羽、志摩……。

自分たちが巻き込まれている事件は、あそこのあるのではないだろうか。

そう思った勝俊は、黒崎の情報を頼りに、その地に行ってみようと思っていたのである。

しかし、その事件の鍵を見つける前に、やらなければいけないことがある。だから、彼女が来るのを待っているのだけど……。

夕日も顔を隠し、辺りが暗くなりかけてきた。

次のバスが、あの場所に行く最終便になるだろう。乗るしかないか……。

ビルの陰から、彼女は出て来た。そしてまっすぐこの停留所に向かって歩いて来る。

近くまで来た彼女は、勝俊の顔を見て立ち止まった。

「——来ないのかと思ってたよ」

勝俊は、若宮遥の顔を見て、そう言った。

「伊勢に行くの？」

遥はそう訊いた。

「ああ。行く意味があるのか、俺にも分からないけど、前から気になってたんだ」

「あのおじさんの事よね。でも、もう亡くなってる。本当に可哀想なことをしたわ」

「黒崎さんが言ってたよな。家族がいるって。会ってみたいんだ」

「会ってどうするの？」

「——分からない」

勝俊は一瞬ためらってから、そう言った。「分からないけど、何かが見えるような気がするんだ」

この思いは、黒崎から情報を得たときから勝俊の中でくすぶっていたものだ。まさか残された家族が俺たちに復讐するとは考えられないが。

いや、ありえないことではないだろう。だから勝俊は迷っていたのである。

しかし自分たちがあの事件を起こしたのは、あのオッサンが離婚した後である。しかも、何かが気になっていたのだ。

「それで……」

遥はちよつと迷ってから、「私に話って、何？」

と言った。なぜか訊くのが怖い、と思ったのだ。

「一緒に行ってくれないか」

勝俊の言葉を、遥の中で理解するのに少し時間がかかったような

気がする。

「どうして？ 私が行ってなんになるの？」

「分かってるだろ、俺の気持ち。若宮——いや、遥。俺、お前のが好きだ。前から、小学校のときから好きだったって、知ってたよな」

まだ遥が智哉と付き合う前、一度告白したことがあった。その時はうやむやになったままで、何の進展もなかったのだが、智哉と付き合うようになってから、勝俊は想いを心の中にしまっていたのである。

「私の彼氏、もちろん誰だか知ってるよね」

「ああ、あいつは俺の親友だ」

「じゃ、なぜそんなこと言うの？ しかもこんな時に」

「こんな時だから……かな。正直言って、智哉が電車で撥ねられたとき、このまま死んでくれたらと思ったよ」

「ひどい……ひどいわ！」

「俺だって自分が情けないと思ったよ、そんなことを考えるなんてでも、もう我慢できない。俺たち、いつ殺されるか分からないんだ。お前を好きだって言う気持ちを抑えられないんだ」

突然、勝俊は遥を抱き寄せ、その唇を奪う。一瞬のことに、遥は、抵抗することさえできなかった……。

病院を出た智哉は、母親と運転手に手伝ってもらって、車椅子専用のタクシーに乗り込んだ。

「いてっ！」

額の傷が、少しだけ痛んだ。ほとんど治ってはいるが、あのオッサンが投げた石の感触が甦るのだ。

この病院の階段で転んでから、ちょうど一週間が経っていた。どうやら三日間ほど意識が戻らなかったらしい。

その間、いろんな夢を見ていたような気がする。小学校の時のあの事件から、最近立て続けに起こる事件。もちろん僕が代行業者に依頼してやらせていることではあるが、どうもそれだけではない、他の要素が絡んでいるような出来事。

それらのことが、何度も何度も僕の夢の中に現われては消え、また同じようなシーンが現われる。

「――大丈夫？」

母親が心配そうに覗き込む。

「うん、大したことないよ」

そして、遥とは、まだ連絡が取れていない。

僕が怪我をする前、電話をかけても出なかったことを思い出したが、その後も電話に出ることはなかった。

どうしたんだろう……。

とりあえず、今日はこれから帰ってパソコンを開いてみなければならぬ。代行業者からのメールがたまっているはずだ。

それからもう一つ、頭の中に焼きついた椎名の死。

僕は最初の事故を目撃している。確かにあの事故で彼女は死んだはずだ。あの壮絶さは、生き残ることなどできないと確信せざるを得ないものだったのだ。

その椎名が、遥の部屋で倒れていた。

――僕の中で、ある考えが浮かんできた。椎名が二度も……ではなく、椎名が二人、と考えたらどうなるだろう。

つまり、椎名は双子だった、と考えれば……。

双子……。どこかに接点があるような気がする。

タクシーがゆっくりと滑り出し、大通りを静かに走り始めた。

見慣れた町が、夕暮れのベールをかぶろうとしている。

辺りは薄暗くなりかけて、僕はぼんやりと外を眺めていたのだ。バス停に立っている勝俊の姿が、僕の視界に入った。

その横にいるのは……遥じゃないか！ あの二人、何やってるんだろう。

停まってもらおう、と運転手に声をかけようとしたときだった。

二人が抱き合う。そして、僕でさえまだ経験していない、遥とのキスシーン。

勝俊と遥が抱き合ってキスしているところを見ながら、タクシーはあっという間にバス停を通り過ぎていったのだった……。

（後書き）

これはリレー小説です。

リレー小説とは、複数の筆者による合同執筆（合作）を言います。ご参加頂ける方は、聖魔光闇先生までメッセージにてご一報下さい。

参加していただける方は、再度メッセージにて、正式に依頼させていただきます。

その後、投稿後に、もう一度ご連絡いただきますよう、お願い致します。

現在、18話以降の執筆担当者様を募集しております。皆様のご参加、心よりお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1985w/>

またいつか一緒に【第16話】

2011年8月28日17時04分発行